

ダニー・ラフェリエール著
『書くこと 生きること』
(小倉和子訳) 藤原書店、2019年

Dany Laferrière,
J'écris comme je vis. Entretien avec Bernard Magnier,
Genouilleux, La passe du vent, 2000

関 未玲
SEKI Mirei

作家の語る言葉というのは、稀にはあるがときに文学作品を越える力を持つことがある。本書は間違いなく、この例にカウントされる作品と言えよう。1985年、『ニグロと疲れなくてセックスする方法』というセンセーショナルなタイトルを持つデビュー作で一躍時の人となったダニー・ラフェリエールが、『アメリカ的自伝』と称される初期10作品を執筆後に対談本として刊行したのが、本書である。『エロシマ』、『若いニグロの手の中の柘榴は武器か、それとも果実か?』、『吾輩は日本作家である』（『アメリカ』シリーズ完結後に執筆）など、一見胡散臭いとも思えるような、しかし一度聞いたら鮮明に記憶に残るタイトルで、その都度読者を惹きつけてきた作家の文学ストラテジーとも呼べる感覚が、いったいどこから来るのか、その謎に迫る一冊である。

本学会誌でもたびたびラフェリエールの著作が紹介されたのでご記憶の方も多しと思うし、2019年10月には日本ケベック学会全国大会に招聘され、会長立花英裕氏との公開対談を行った作家だけに、その生い立ちについてはすでにご存知の会員も多いとは思いますが、今一度運命に導かれるように世界を移動し続ける作家の人生を、本書からの引用を引きながら振り返ってみたい。

1953年にハイチの首都ポルトープランスに誕生した作家はデュヴァリエ父子による独裁政権下、4歳にして政治亡命をした父と生き別れている。母国を去った父と再会できたのはその後たった「一度」きりで、残酷ながらそれは「父の葬儀」時であった (p. 39)。ラフェリエールは生前の父をブルックリンに訪ねたが、扉の向こうで「デュヴァリエがすべてのハイチ人をゾンビに変えてしまったから、自分にはもう子どもはいない」(同頁)と言って、父

は息子との再会を拒んだ。実父の亡命の余波が危険となって息子に迫っていると感じた母は、祖母の家にラフェリエールを預ける。「木が伐採されてしまった山とカリブ海のターコイズブルーの海のあいだに挟まれた、きれいで小さな田舎町」(p. 26) プチ=ゴアーヴには、幸いなことに公立図書館があったようだ。しかしその「蔵書はかなり奇妙だった」(p. 49) とラフェリエールは言う。「フランスでほとんど一生を過ごし、亡くなる前に生まれ故郷の町に自分の書棚を寄付したいと望んだプチ=ゴアーヴのある住人のものだったようだ。ほくたちに必要だったのはデュマやモーパッサン、ユゴーやヘミングウェイ、ステイーヴンソン、ヴェルヌ、スウィフトといった、要するに大衆的な古典作品だったのに、その人は死についての研究やブランショのテキスト、現代詩のたくさんの本を押しつけたんだ。奇妙だった。でも、ほくはうつむいて没頭した」(p. 49-50)。文学作品の前に哲学書や現代詩を読みふけた読書体験が、ラフェリエール文学の礎となっていることは間違いない。彼の作品は生きることへの飽くなき執着が溢れている一方で、ある種のニヒリズムがつきまとって離れない。それは死から逆算して算出された生き残りの、まるでカウントダウンのように過ごされる時間が描かれているからなのではないか。

「祖母の大きなスカートの下で暮らしていた」プチ=ゴアーヴでの数年は、「人生の幸福な時期」(p. 31) であり、祖母ダーは「間違いなく、ほくの人生にもっとも強い影響力を与えている」(同頁)。愛するダーのエピソードが紹介されている。「ラマル街八八番地の家は事実上、祖母が自分の手で建てたものだ。祖父母は結婚したてで、二人は一銭ももっていなかった。祖母はベルトをきつく締めて、唯一の食糧である一塊の岩塩を、飢餓性衰弱に陥らないように舐めていた。ほくに話してくれたんだけど、祖母は何年も同じ黒い服を着ていた。ずっと前に亡くなった親類の喪に服しているんだと、みんなに思わせていたんだ」。マニエが尋ねる「どうして黒い服なのかな?」。「一着あれば足りるからさ。黒い服が何着あるかなんて、誰にも分らないからね」(全て p. 32)。祖母の処世術は、ラフェリエールの作品からニヒリズムを一掃することはないが、これを和らげる術を作家に与え、作品の緩やかさにつながっているだろう。『コーヒーの香り』、『限りなき午後の魅惑』と言った作品だけでなく、多くの著作にダーの姿が織り込まれていることを、作家は認めている。

ジャーナリストとなったラフェリエールに、父と同じ運命がふりかかる。

デュヴァリエによって父がハイチを去ることを余儀なくされたように、デュヴァリエの息子によってラフェリエールもまた、ハイチを去ることとなった。同僚が殺害されことに我が身の危険を感じた作家は、23歳で祖国を去り、ケベックへと移住する。命は助かったものの、新天地ケベックでの下積み時代は予想していたよりも厳しく、長いものとなった。対談でも、詳しく当時の状況が語られている。モンレアルの空港で夜勤のトイレ清掃を担当していたこと、工場に勤務していたこと、ハイチでジャーナリストをしていたとうっかり口を滑らせたために、誇大妄想のほら吹きだと噂を広められてしまったことなど。彼が最初の小説を発表するまで、すでに10年もの月日が経ってしまっていた。デビュー作『ニグロ』が、商業的な成功をおさめなければ、次のチャンスまでさらに10年がかかることを、ラフェリエールは覚悟していたのだろう。「タイトルはあくにとって本のエッセンス」と明言する作家は、内容にも抜かりがない。「人種的対立という側面から性的関係」(p. 232)を扱う『ニグロ』では、「モンレアルのど真ん中の、大学から一五分のところにある第三世界」(p. 246)が「麻薬も暴力も使わず」(同頁)に、実にお手軽に提供されている。作家は分析する。「白人女性としては、男性ニグロより上に位置している。だから、この種の性的興奮をもたらす、かなり興味深い小さな変動が現われるんだ。これがその動揺の瞬間だ。関係の中でどちらが優位に立つか？(…)権力闘争は恐ろしいものになるだろう」(p. 233)。「自殺的な試み」(p. 235)と称される、小説の手のうちを明かす手法さえ、彼の文学の営みのプロセスに戦略的に組み込まれている。これほど明晰に、これほど冷徹に自己作品をプロデュースできる作家は、類まれと言えるし、その全てを引き受ける作家像こそがラフェリエールの魅力となっているのだろう。しかし偉大な作家であっても、良き聞き手を持たなければ本書の力強さは生まれなかったはずである。

対談はラフェリエールがフランスのリヨン郊外にある作家専用のゲストハウスであるグリニー館に滞在中の、1999年秋に行われた。インタビューアはジャーナリストのベルナル・マニエで、訳者解説によればアクト・スエド社刊『アフリカ文学』コレクションを監修し、混血文学フェスティバルも企画している。マニエには、英雄のように亡命作家ラフェリエール像を作り上げるような意図はない。ラフェリエールの怒りが生まれるその僅か手前を、いつも狙ってマニエは質問を投げかける。質問はときに容赦ない。「きみはこうやって、すべてをばかにするのかな？」(p. 238)。「きみは奴隷制のテー

マに関心をもったことは一度もないの？」(p. 239)。「きみは自分だけ得をしようとしていないか？」(p. 240)。このような質問の連続が、緊張感を生まないはずはない。ラフェリエールが、このようなマニエの挑発に伸るか反るか、まるでドキュメンタリーを見るようなスリリングな臨場感を本書は伴っている。

対するラフェリエールの返答も、最後まで隙が無い。作家は自らの文学指針を吐露する。「ハイチについて刊行されるものはすべて同じような調子で書かれているんだ。まず貧困を確認することから始まり、それから何かしてみたいと思い、最後には、事態はもっと複雑だということを受け入れてしまう。でも読書っていうのは、ある国の運命を憐れむためにばかりするものじゃないよね。たとえその国が極度に混乱している国だったとしても。読む理由も書く理由も無数にある。ほくにとっては、生きるためだ。誰もほくに書いてほしいと頼んだわけじゃないから、何を書くべきか誰からも命令されることはないだろう。ほくが絶筆したとしても、おそらく誰も気づかないだろう。ほくにとって書くことは、おそろしく苦しい制約の中で絶対的な自由を行使することなんだ」(p. 79)。ラフェリエールの半生を少なからず知り、彼の文学に触れた者であれば、この言葉がどれだけ重みのある告白なのか、すぐさま理解できる。そして絶対的な自由の行使が、苦しみに置かれた人間に残された文学の可能性なのだ、作家の言葉に同意して称賛すれば本来は良いのだと思う。しかしマニエは作家の発言をここで止めてしまわない。文学が生産性から取り残されてしまった21世紀を生きる作家ラフェリエールの、したたかに生き抜く生命力を全面的に引っ張りだすために、聞き手はさらに畳みかける。「いや、きみは腹の中に、ほかのものも持っていると思うな」(p. 80)。ラフェリエールが文学のための文学ではなく、生きることと密接な関係を持つ文学空間をもたらず作家だからこそ、マニエは亡命作家の指針をあらゆる読者の生活ともリンクを結べるように、そっと手を差し延べるのだ。ラフェリエールはマニエの意図をすぐさま理解し、「じゃあ探しに来てよ」と応酬する(同頁)。作家はハイチの問題が、もっと別のところにあることを知っている。祖母の話語りながらラフェリエールは次のように、苦境時に頭をもたげる、他者をはげ口にせずにはいられない人間の闇を指摘する。「正義感が強かったんだろう。弱い者いじめをするやつらを心底嫌っていたから。そしてそこにこそ、ハイチの問題の核心があるんだ。この国では、無一文の者でさえ、汚らしい犬を見つけて足蹴りを食らわすのさ」(p. 32)。この見事な

やり取りのお陰で、『書くこと 生きること』は作家の執筆に対する姿勢をたんに明らかにするような対談を優に超える。

2013年に終身となるアカデミー・フランセーズ会員に選出されていらい、大作家の仲間入りを果たしたラフェリールは、毎週木曜日に開かれる定期会合に出席するため、現在ではパリを拠点に活動している。この間、ハイチ出身亡命作家、ケベック移民作家、「カリブ作家、混交の作家、ポストコロニアル作家、黒人作家」(p. 161)、フランス語圏作家、と彼に対するイメージも変貌を遂げている。しかし彼は言う。「それって何だい？」(p. 162)。ジャーナリストという肩書が亡命先では弊害にしかならなかったことを知っている作家は、これからも私たちの予想を何歩もリードする世界から、作家というイメージを更新し、執筆し続けるにちがいない。

最後に、本文の後に付された訳者による略年譜とハイチの作家一覧は、本書を読む際に大きな助けとなっていることを、ここに申し添えたい。